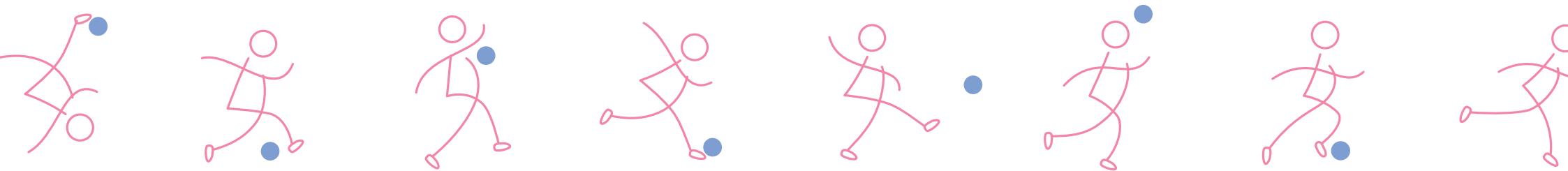


PASS TO THE FUTURE

HOKKAIDO FOOTBALL ASSOCIATION



[北海道のフットボールを支える女性たち]





21人の先輩たちの経験が
皆さんの未来につながりますように



PASS TO THE FUTURE

はじめに

2020年度は、コロナウイルス感染症の影響のより北海道でも9月から大会が開催されるなど今まで経験したことのない大きな影響を受けました。改めてスポーツの大切について考えさせられた1年であったと思います。

さて、JFAは日本の女子サッカーの目指すべき姿を定めた「なでしこビジョン」を掲げ、女子サッカーの普及と発展を目指すとともに、女子サッカー固有の価値でサッカー・スポーツ、社会の発展に貢献し、女性活躍社会へとつなげていくことを目標としています。北海道においても、女性の活躍を体現する優秀な女性たちが、指導者や審判、運営スタッフなどの様々な立場で、サッカー・フットサル界を支えています。多様な職業や家庭人としての生活基盤を持つ彼女たちが、様々な選択肢を前にして何を基準に何を選んできたのか、サッカーやフットサルがいかに原動力となりえたかを知ることは、若い選手の皆さんにとって、生涯にわたってスポーツにかかわり続けるためのヒントになればと考え、JFA女子サッカーデー事業として、『PASS TO THE FUTURE-北海道のフットボールを支える女性たち-』を製作しました。

2021年9月、日本初の女性のプロサッカーリーグが開幕します。WEリーグ(Women Empowerment Leagueの略称)は女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人一人が輝く社会の実現・発展に貢献する」と理念を掲げています。日本のみならず世界中の女子選手にプロサッカー選手という道が開かれました。北海道出身の女子プロサッカー選手がたくさん誕生することを期待しています。さらに、このプロリーグ開催より、審判員や指導者など女性が活躍する場が増えます。北海道サッカー協会としてもこの機会に人材育成や環境づくりを後押しできるよう取り組んで行きたいと考えています。

昨今、女性が活躍する話題も耳にすることが多くなっていますが、女性が置かれている立場は、女性にとってまだ満足のいく社会には至っていません。男性と比較しても、仕事の内容であるとか、収入、地位、また、女性はこうあるべきであるという社会の目によって、障壁も多く大変不自由であるというのが日本の現状です。また、妊娠や出産、育児などの理由で、仕事を続けるかどうか、重大な選択をしなければならないのは女性です。また、コロナの影響で、女性の置かれた状況は数十年前の状況に戻ったとも言われています。日本のジェンダーギャップ指数は、世界153国中、121位だそうです。日本では、まだまだ男女の格差が大きく、男女平等にはなっていません。女性がやりたいことがやれて、活躍できる社会にするためには、正しい認識や、社会の問題にも目を向けていくことも大切です。そのために、仲間を増やし、いろいろな人の協力を得たりすることが必要となります。

『PASS TO THE FUTURE』本冊子が、選手の皆さんのが将来に向けたPASSとなり、さらにその先にもつながっていくことを心から願っています。

最後になりましたが、ご寄稿を賜りました熊谷選手、高瀬選手、手代木審判員、選手たちのためにご経験を語ってくださった21名の女性の皆さま、編集にご尽力いただきました株式会社ベンヌ様、INAC神戸 レオネッサ様、北海道協会事務局のスタッフの皆さまをはじめ、関係各位に心より御礼申し上げます。また、本冊子は、JFAが発行した『サッカー ×キャリア×未来～ Your Life with Football～』を参考にさせていただき製作に至りました。ご助言をいただきましたJFAの皆さんに、心より感謝申し上げます。

公益財団法人 北海道サッカー協会 副会長

鷲津 裕美



SAKI KUMAGAI



真駒内サッカースポーツ少年団からクラブフィールズ・リンダを経て、宮城県の常盤木学園高等学校女子サッカー部へ。筑波大学で学びながら浦和レッドダイヤモンズで活躍。現在は、オリンピック・リヨン(フランス)所属。2011年FIFA女子W杯では全試合に出場し、なでしこジャパンの優勝に貢献。現なでしこジャパンの主将。

熊谷 紗希 さん
[札幌市出身]

選手の皆さんへ

私がサッカーを始めたのは、4歳上の兄の影響です。今は女子だけのサッカーチームが数多くあるとは思いますが、その当時は女子だけのチームがなく、男子に混ざってやることが当たり前の環境でした。昔から負けず嫌いな部分もありましたが、何より「大好きなサッカーが上手くなりたい、大好きなサッカーを楽しむ」一心でサッカーと向き合ってきました。

今でもそうですが、サッカーを嫌いになったことは一度もないです。もちろん上手くいかないことも沢山ありますが、そんな時でも楽しめるように、ポジティブに捉えています。自分が楽しんでいる時ほど、良いプレーができるし、上手くなれると思いますので、是非皆さんにもその気持ちを持ち続けてプレーしてほしいなと思います。

そして、子供たちに伝えたいこととしては、感謝の気持ちを持って、何事も「楽しむ」ということです。自分が好きなことに取り組める環境に、そしてそんな環境や自分自身を支えてくれる方々に感謝の気持ちを持って、好きなことを全力で楽しんでください。

私は高校で親元を離れ、当時は感謝の気持ちを伝えたり、感じたりする機会は中々なかったですが、プロサッカー選手になり改めて、家族、そしてサッカー関係者の方々に感謝の気持ちを強く感じています。

北海道のサッカーを支える皆様へ

この世界的なコロナ禍の中、私としても昨年は人生ではじめてと感じるほどサッカーが出来ない状況に直面しました。試合もなく、チームの活動もできない状況が3ヶ月ほど続き、活動が再開されることになって改めてサッカーができる喜びを感じました。

サッカー関係者の方々に大変感謝しております。

今年ついに日本女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」がスタートしますが、地元北海道のチームが将来的にこの「WEリーグ」に参戦し、北海道のサッカーが今よりもさらに発展することを願っています。



MEGUMI TAKASE



北見オニオングッド、北見トリルウイングス、網走ジュニアユース、釧路リベルティを経て北海道文教明清高校女子サッカー部へ。卒業後、INAC神戸レオネッサに入団し新人賞を獲得。2011年FIFA女子W杯ドイツ大会の優勝メンバー。INACの中心選手として日本の女子サッカー界を牽引し続け、2021年9月開幕のWEリーグでの活躍も期待されている。

高瀬 愛実 さん
[北見市出身]



全ての指導者、運営スタッフ、審判の皆さんへの感謝を

私は中学生まで地元の北見市でサッカーをしていました。地元に女子チームがなく、週末に釧路にある女子チームの練習に参加していました。地元の男子チームにも所属していましたが、女子だけでサッカーができる事がとても楽しかったのを覚えています。

この釧路のチームとの繋がりを作て下さったのが地元にいた唯一の女性コーチでした。この方がいなければ女子サッカーという世界に触れずに思春期を迎え、高校生になるまでサッカーから少し距離を置いていたのではないかと思います。

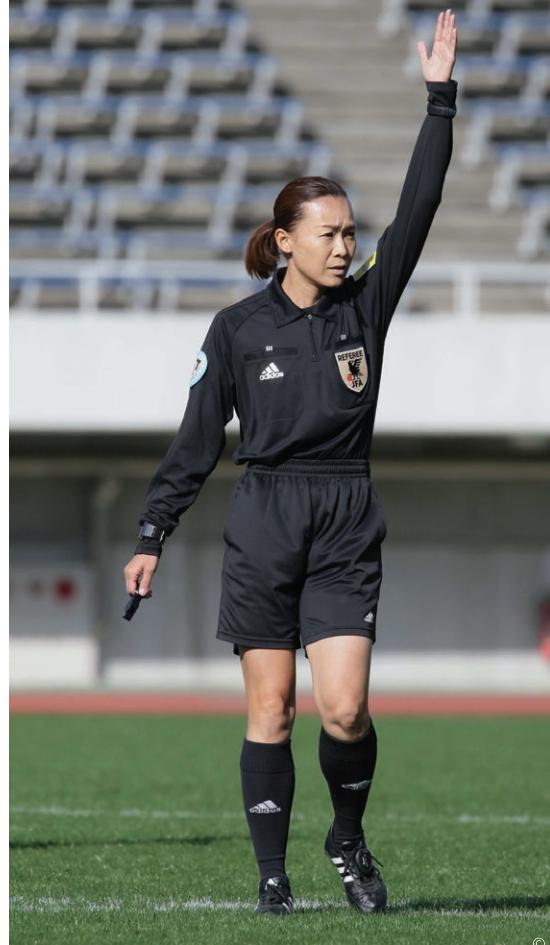
高校入学で地元を離れる時、振り返ると多くの指導者の方やサッカー関係者、そして家族が、私がサッカーを続けられるようにと何とか道を作ってくれていたのだと気づき、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今の自分があるのは、これまで関わってきて下さった全ての指導者の方々のお陰です。好きな事に全力を注げる場所があったのは、いつも大会を運営して下さるスタッフの方々、同じ熱量で試合をしてくださる審判団の皆さんのがいたからです。ありがとうございました。

感謝の気持ちを忘れず、初心を忘れない

選手の皆さん。どんな時も感謝の気持ちを忘れず、そして出会った方たちにしっかりと感謝を伝えられるような選手でいてください!

私もそんな選手でいられるよう初心を忘れず頑張っていきたいと思います。



女子サッカーに関わる皆さんへ

様々なスポーツの中から女子サッカーに出会い、審判に魅力を感じ、私がサッカーに関わり続けていられるのは、活動を支えてくれる皆様の応援のおかげです。

審判活動は時に苦しいこともありますし、辞めたいと感じることもありますが、支えてくれる仲間や、女子サッカーの魅力を教えてくれる選手の活躍から勇気をもらい、継続することの大切さを学ばせてもらっています。

ルールを守ること、仲間を大切にすること、感謝をすること、挑戦すること、諦めないこと、正直に生きること、他にもたくさん大切なことを、審判活動を通じて気づかせてもらいました。

これらの経験は、社会において必ず役立つことであり、マイナスになることはありません。サッカーに限らずスポーツは、する人・見る人・支える人がいて成り立つものです。様々な立場からスポーツに関われることに喜びを感じ、これからも女子サッカーの魅力を多くの皆さんに伝えられるように、共に協力して盛り上げていきましょう。

NAOMI TESHIROGI



帯広南商業高校女子サッカー部の顧問の先生の勧めで審判員3級資格取得。整形外科で勤務しながら女子1級審判員を目指し、26歳で取得。FIFA国際審判員にJFAから推薦され、AFC主催大会で副審として経験を積み、2015 FIFA女子ワールドカップ、リオデジャネイロオリンピックと活躍を広げている。現在、秋田県秋田市在住。

手代木 直美さん

[清水町出身]

INDEX

はじめに	②
鷺津 裕美	
北海道の女性たちへのエール	③
熊谷 紗希	
高瀬 愛実	
手代木 直美	
INDEX	⑤
21人のPROFILE	
MESSAGE	
01 中川 綾子	⑦
02 大岩 真由美	⑧
03 勝谷 忍	⑨
04 稲葉 里美	⑩
05 浅利 清美	⑪
06 遠藤 晴美	⑫
07 根岸 瞳美	⑬
08 中村 麻衣	⑭
09 詫間 美樹	⑮
10 金子 弘恵	⑯
11 浮田 あきな	⑰
12 藤村 茉由	⑱
13 浜田 亜紀子	⑲
14 宗像 訓子	⑳
15 三澤 純子	㉑
16 坂本 葵	㉒
17 茅津 都	㉓
18 森野 久美子	㉔
19 安芸 瑞穂	㉕
20 長濱 由紀子	㉖
21 河原 しおり	㉗
PASS TO THE FUTURE	㉙



21人の PROFILE

RYOKO NAKAGAWA

01

中川 綾子

[小樽市出身]

(公財) 北海道サッカー協会 理事
女子委員長 第3種委員会委員／
仁木町立銀山中学校教諭

――【後押ししてくれているひと・リスペクトしているひと】――
岩見沢の大原勇治先生のおかげで中学校教諭を目指し、現在の自分につながりました。
日本サッカー指導者協会の藤原明夫さんのパワフルなご活動・人をつなぐ力をリスペクトしています。

SATOMI INABA

04

稲葉 里美

[恵庭市出身]

サッカー女子1級審判員

――【私の原動力】――

私のやりたいことを最後まで反対せず応援してくれる家族、そして悔し涙を流してしまったときも親身に支えてくれる審判仲間は、私の原動力です。

MUTSUMI NEGISHI

07

根岸 瞳美

[苫小牧市出身]

苫小牧地区サッカー協会 女子委員長

――【リスペクトしているひと・後押ししてくれているひと】――
苫小牧地区協会 副理事長の黒澤幸子さんは、私にサッカーの楽しさを教えてくれた「若草レディース」のチームメイトであり、女子委員長としての私を支えてくださっています。

MAYUMI OIWA

02

大岩 真由美

[室蘭市出身]

(公財) 北海道サッカー協会 理事 審判委員会委員／
室蘭地区サッカー協会 副会長 女子委員会 審判委員会／
JFA S級レフェリーインストラクター兼アセッサー
女子1級審判育成指導アマチュア分科会

――【後押ししてくれているひと】――

未知の世界、審判への道に悩んだとき、「お前が歩けば道ができる!」と中学時代の恩師からいただいた言葉が、今でも私の背中を押してくれています。

KIYOMI ASARI

05

浅利 清美

[函館市出身]

BP函館キルティ・BP函館キルティ U-15 監督／
JFA 女子サッカー普及コーディネーター 道南地区担当／
(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
函館地区サッカー協会 女子委員長・技術委員会 トレセンコーチ
乙部町立乙部中学校 養護教諭

――【支えてくれているひと】――

チームメイトや各地でサッカーに関わっている方々との繋がりです。そして、最も支えてくれているのは家族です。

MAI NAKAMURA

08

中村 麻衣

[北広島市出身]

JFA女子サッカー普及コーディネーター 北海道 札幌地区担当／
(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
(一社) 札幌サッカー協会 理事 女子普及担当／
TeineEGZASFC監督兼選手／リカシィ コーチ／なでしこ治療院 院長

――【私の原動力】――

自分自身が、選手時代に色々な方達に関わってもらい、支えてくださったことへの恩返しをしたいという気持ちが、今の自分の活動を支えています。

SHINOBU KATSUYA

03

勝谷 忍

[札幌市出身]

(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会
審判委員会／2級審判員／
L・KAJI-MA 選手

――【支えてくれるひと】――

同じ目標に向かって共に活動してくれる仲間たち。サッカーは一人では出来ないし人間は一人では生きていけない。支えあえる仲間がいるからこそ前に進めます。

HARUMI ENDO

06

遠藤 晴美

[幕別町出身]

十勝地区サッカー協会 女子委員長／
BIGZ池田 代表／
(福) 池田光寿会 課長・介護支援専門員

――【刺激を受けたひと】――

日本で最初の女性指導者といわれる綾部美知枝さんには女性もサッカーで活躍できることを教えてもらいました。

MIKI TAKUMA

09

詫間 美樹

[札幌市出身]

北海道札幌東商業高等学校女子サッカー部 監督／
北海道札幌東商業高等学校 教諭
(2021年度よりノルディア北海道 監督)

――【後押ししてくれているひと】――

サッカー中心の生活を送ることができたのは、両親や姉弟のおかげです。社会人3年目、初めて父が私の試合に夢中になったといってくれました。とても嬉しい出来事でした。

HIROE KANEKO

10

金子 弘恵

[稚内市出身]

ノルディーア北海道 チーフマネージャー

[リスペクトしているひと]

ノルディーア北海道の選手たちの社会人と選手との両立している姿は逞しく、輝いています。誇りをもってサッカーの面白さや素晴らしさをたくさんの人々に伝えて欲しいなと思います。

SATOKO MUNEKATA

14

宗像 訓子

[浦河町出身]

北海道コンサドーレ札幌 サッカースクールコーチ
アカデミーコーチU-12 Girls
JFA公認B級コーチ 47FAインストラクター
NPO法人さっぽろAMスポーツクラブ

[リスペクトしているひと・憧れているひと]

大空翼君にきっかけを作ってもらい、KAZUさんの存在がサッカー界に引き込んでくれました。そして、「ボールは友達」を体現する小野伸二選手に憧れています。

KUMIKO MORINO

18

森野 久美子

[函館市出身]

エスボラーダ北海道イルネーヴェ コーチ U-15監督／
(公財)北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
北海道フットサル連盟 常務理事

[リスペクトしているひと]

エスボラーダ北海道の指導者の皆さんは、選手としてフットサルという競技を北海道に確立し、引退して指導法を学び、いくつもの戦術を実践しています。憧れであり目標です。

AKINA UKITA

11

浮田 あきな

[釧路市出身]

北海道リラ・コンサドーレ監督／
JFA公認B級コーチ

[信頼できる仲間]

リラに関わるスタッフは、なんでも相談できる頼もしい仲間です。指導者同士のコミュニケーションやチームワークもリラ・コンサドーレを支える重要な要素だと思っています。

JUNKO MISAWA

15

三澤 純子

[浦河町出身]

札幌大学女子サッカー部ヴィスタ 監督／
JFA公認B級コーチ／
札幌大学 事務職員

[私の原動力]

指導者になってから関わった選手(卒業生を含む)たちが私の原動力です。選手たちが居なければ私は指導者としてサッカーに関わることはできません。心から感謝しています。

MIZUHO AKI

19

安芸 瑞穂

[札幌市出身]

(公財) 北海道サッカー協会
事務総長

[リスペクトしているひと]

長きにわたり仕事にもサッカーにも情熱を注がれ、サッカーを通じて豊かな人生を送られている北海道のシニア諸先輩方を目標にし、リスペクトしています。

MAYU FUJIMURA

12

藤村 茉由

[旭川市出身]

(一社) コンサドーレ北海道スポーツクラブ
スクールコーチ

[サッカーの楽しさを教えてくれたひと]

小学生のとき、はじめてサッカーを教えてくれた廣川コーチと鈴木コーチのおかげで、サッカーの楽しさを知りました。その気持ちを今も持ち続けています。

AOI SAKAMOTO

16

坂本 薫

[旭川市出身]

旭川実業高等学校女子サッカー部 監督／
JFA公認C級コーチ・GK-C級コーチ／
旭川地区サッカー協会 女子委員会 委員／旭川女子トレセンスタッフ／
旭川実業高等学校 教諭

[支えてくれているひと]

チームの選手と家族が私を支えてくれています。私も笑顔をくれる選手のおかげで今の自分があります。私の家族は、何も言わずにどんなときでも支え、応援してくれます。

YUKIKO NAGAHAMA

20

長濱 由紀子

[蘭越町出身]

(公財) 北海道サッカー協会
事務局長

[リスペクトしているひと]

信念をもって努力できる澤穂希さん、いつまでも現役でいらっしゃる三浦知良さんをリスペクトしています。

AKIKO HAMADA

13

浜田 亞紀子

[東京都出身]

(株) コンサドーレ
マーケティング・プロモーション事業部
プロモーション担当

[リスペクトしているひと]

弊社代表の野々村芳和です。昔から度々意見がぶつかるのですが、最後には野々村の方が良いアイディアを思いつくので。いつかぎゃふんと言わせたいですが、今のところ、敵いません。

MIYAKO KUKITSU

17

茎津 都

[札幌市出身]

(一社) 北海道フットサル連盟
常務理事 事務局長 フットサル女子委員長／
(有) くきつ 代表取締役

[リスペクトしているひと]

中学の恩師、体育教師だった坂野勝彦先生は、サッカー経験がない中、熱い気持ちで指導法を勉強し、チームを全国ベスト8に導いてくれました。

SHIORI KAWAHARA

21

河原 しおり

[深川町出身]

(公財) 北海道サッカー協会 女子ユースダイレクター
技術委員会 女子担当 北海道トレセンスタッフ／
札幌東商業高校 保健体育科教諭
(現在育休中；女子サッカー部監督*2018・2019年度)

[リスペクトしているひと]

筑波大学女子サッカー部を創部した小林美由紀さんのゼロから新しいことを作り、周りを巻き込むパワーは本当に尊敬していますし、見習いたいといつも思います。

RYOKO NAKAGAWA

中川 綾子

公益財団法人北海道サッカー協会 理事／

女子委員長／第3種委員会委員／

仁木町立銀山中学校教諭(専門は保健体育と社会。主たる業務は特別支援学級の担任。)

長年女子委員長を務められた鷲津裕美さん(現北海道協会 副会長)から
任を引き継ぎ、1年目を終えようとしている中川綾子さん。
3種や4種の経験、本業である中学校教諭としての経験を活かし、
北海道の女子サッカー界に新しい風を吹き込んでいます。



様々な「出会い」がサッカーとの 結びつきを強めていく

父が古河電工で勤務していたため、小さい頃からサッカーは身近な存在でした。5歳の時、横浜の社宅のまわりにはサッカー選手が暮らしており、目の前は三ツ沢公園球技場。日本リーグは当たり前に観に行けて、「近所のお兄さん」だった吉田弘さんや菅野将晃さんが「鳥かご」をして遊んでくれる、今思うと、とても恵まれた環境でした。小学5年の秋に札幌に戻りましたが、サッカー少年団には入れず、バレーボールで身体を動かしていました。

中学生になり、東白石中学女子サッカー部に入部。ですが、3年生が引退したらチームが休止状態に。中3の時に下の学年が多く入ってきたのでGKで試合限定の復帰をしました。高校時代にJリーグが開幕したこともあり、スポーツに興味を持ち、北海道教育大学教育学部岩見沢校社会教育課程スポーツコミュニケーション分野に入学。大学では指導教官と



'rioのお手伝いの延長で小樽地区協会の女子委員長を務めるようになりました。このとき、前女子委員会副委員長であった渡邊均さんからHKFA女子委員を兼任するよう声をかけていただき、今につながっています。

多くの方に耳を傾け、 「繋いでいくこと」が重要な役割

北海道は1都道府県としてだけではなく1地域としての活動と兼ねているため、全国大会につながる全道大会を開催するための業務が多くあります。また、男子で言うと1種(社会人)～4種(U-12)までをカバーしなければならないため、選手人口は男子よりも少ないものの、幅広い年代について考えながら動いていかなければなりません。今後、JFAの指針により、女子の大会形態は男子に近づいているため、組織の中でカテゴリー化が必要になってくるのではないかと思っています。そのためには、様々な情報を北海道の女子サッカーにかかる多くの方と共有し、事業を進めていく必要があります。話を聞きする場を数多く持ち、男子の各種別の方とも連携していくこと、皆さんを「繋いでいくこと」が女子委員長の重要な役割だと認識しています。

教員をしながら重要な任についており、他の指導者やスタッフの方と同様、つねにダブルワーク状態なので、いつ自分のキャパシティを超えてしまうのではないかと不安はありますが、職場には、応援してくださる方が多く、支えになっています。また、女子がサッカーをやりづらかった時代を知っているだけに、少しでも障壁をなくしたいと思う気持ちは、今の私の原動力であり、選手の笑顔がたくさん見られるとやりがいを感じます。今後も皆さんにご助言をいただきながら、女子サッカーの環境作りに貢献できたらと思います。

MAYUMI OIWA

大岩 真由美

公益財団法人北海道サッカー協会 理事・審判委員会女子部
 室蘭地区サッカー協会 副会長・女子委員会担当・審判委員会担当
 JFA S級レフェリーインストラクター兼アセッサー
 JFA女子1級審判育成指導アマチュア分科会

国際審判員として活躍し、日本の女性審判員の「道」を開拓してくださった大岩真由美さん。

後進の育成に努めながらも、今もサッカーが自分を成長させてくれると、力強い言葉をいただきました。

恩師の言葉を支えに、女性審判の道を拓く

高校まではバレーボール部でしたが、中学時代に、高校選手権3位になった室蘭大谷高校をテレビで見て、サッカーの魅力に取りつかれ、高校卒業後、室蘭武陽サッカー少年団にコーチとして入団しました。スポーツを通じて大切なことを伝えることのできる指導者になり、ルールを覚るために審判員としての活動もはじめ、また、少年団のお母さんたちとともにつくった女子チームで選手としてもピッチに立ちました。

やがて、審判員の上級へ挑戦するか、チー

ムの指導者かと立ち止まって考える場面に。審判の道は全くの未知の世界であり、悩んだ際に中学時代の恩師に相談にいきました。その時に頂いた一言は「お前が歩けば道ができる！」。今まで背中を押してくれている大切な言葉です。

2002年にFIFA主催大会で日本人女性初の主審としての任を務め、2004年には女性初の1級審判員の資格を取得。JFLでも笛を吹くようになりました。その後、女子W杯2007中国大会に主審として参加し、決勝にも第4審判員として参加するに至りました。

文字にすると順調にキャリアを重ねたように見えますが、恩師の言葉どおり、前例のないものへのチャレンジばかり。同じ経験をしている仲間も、悩みを共有できる仲間もなく、先の見えない道に悩み、苦しみ、「女性だから」という偏見との闘いの日々。安定した職や収入を得る保証もなく、実際、私が転職をした回数は、30回。そんな中でも、多くの審判指導者の方々が、勇気を持って、女性の私を起



2007FIFA女子ワールドカップ準決勝

用し続けてくださったことで、諦めずに続けることができ、その感謝を行動で示そうと上京し、上級へチャレンジする覚悟もできました。職を転々としたことも、新しい人間関係の中で新しい仕事を覚えていく経験が「いつでも・どこでも・誰とでも」柔軟に対応できるという自分の強みにもつながりました。そして、審判員として、競技規則をしっかりと頭に叩き込み、フィールドで納得のいく判定を続けていくこと、試合にマッチした体力やスピードをつけていくこと。審判員としてなすべきことを積み重ねていったとき、試合の中で、女性への偏見が消えた瞬間を感じました。「選手は性別を気にしている訳ではない！納得のいく判定が欲しいんだ！」と。

指導者を経て、後進の育成へ

国際審判を退いたあと、室蘭大谷高校女子サッカー部の監督に就任しました。選手やスタッフと共に目標に向かって取組む3年間。優秀なスタッフに恵まれ、選手の努力のおかげで目標の「4冠」を達成。内容の濃い感動的で貴重な時間を選手に与えてもらいました。

選手たちやスタッフに心から感謝しています。私のサッカー人生の中で最も印象的な出来事といえるかもしれません。

そして現在は、後進の育成のため、S級レフェリーインストラクター兼アセッサーとして、なでしこリーグやチャレンジリーグの会場に足を運び、試合を担当する女子1級審判員のレフェリングの評価とアドバイス等を担っています。また、北海道の女性審判員の「普及・育成・強化」を支えるべくHKFA審判委員会の女子部の一員として頼もしい仲間とともに働いています。蝦名部長は、誠実でいつもフェアを心がけてくださる新リーダーであり、宮武副部長は、審判割当やトレーニングマッチなどを調整してくださる縁の下の力持ち。大石さんは、遠方にも関わらず、可能な限り研修や大会に参加し、フィジカルコーチにもチャレンジしてくださっています。勝谷さんは、常に審判員と身近に接し、特に若い世代の審判員発掘や指導も積極的に行ってくださっています。

自分の道が意味あるものと実感

私の後に続いて、女性の1級審判員が誕生し、女子W杯では4大会連続で日本の審判員が笛を吹いています。北海道でも女性審判員が増えています。そして、審判引退後のインストラクターへの道も拓かれました。恩師の言葉に勇気をもらってから25年近く経った今、自分の歩んだ道を振り返って、意味あるものと実感できました。

サッカーは、スポーツ本来の面白さや魅力、感動を常に身近に感じることができます。スポーツを通じて多くの人の出逢い、その中で現在も自分を成長させてくれる存在です。これからも、多くの仲間と協力しながら、大好きなサッカー、大好きな審判を、笑顔で楽しみたいと思っています。

SHINOBU KATSUYA

勝谷 忍

公益財団法人 北海道サッカー協会 女子委員会 委員 審判部
 審判委員会 女子部 部員／サッカー2級インストラクター／
 サッカー2級審判員／フットサル2級審判員／L・KAJI-MA 選手・会計担当

バスケットボールの世界からママさんチームでサッカーの楽しさを知り、
 審判の道に進んだ勝谷忍さん。
 審判員の普及・育成活動を通じて、北海道サッカー界の環境整備に力を注ぎ
 サッカーの楽しさを次の世代へ伝えています。

サッカーの楽しさを知り、 もっと学びたいと審判員の道へ

小学生から実業団までバスケットボールを続けており、高校では強豪校に進学したため、全国大会へのプレッシャーを常に感じ、修学旅行さえ断念する日々だったことは、今では笑いの種です。バスケット一色だった私がはじめてサッカーに出会ったのは東京在住時。長男が東京読売ヴェルディのスクールに入ったのですが、そのときのコーチがとてもサッカーが上手で感動したことを覚えています。札幌に移り、息子が入団したサッカークラブ(前田中央FC)にママさんチーム(旧オストローズ現L・KAJI-MA)があり、



自分自身もサッカーをはじめることに。初心者でも楽しめる環境が整っていて、いつの間にか選手として18年の年月を過ごしました。

サッカーが楽しくなってきたころ前田中央FCの監督から声を掛けて頂きキッズリーダーを取得し、幼稚園(さわらびサッカークラブ)でコーチとして子供たちと一緒にサッカーを楽しみながら学ばせて貰いました。同時にもっとサッカーを知りたいと強く思うようになり、周りの後押しもあって先ずは審判資格4級を取得することからはじめましたが、翌年は3級上申、その翌年には2級上申と、周囲の強靭的なサポートにて私の審判人生が走り出しました。

仲間たちに恥じないような 審判員であるために

北海道女子サッカーリーグが開幕したころ、私はまだ3級審判員でした。当時は女子1級の手代木直美さんや佐藤恭子さんが主審をされ



サッカー2級インストラクターを取得した際、サプライズで花束をいただきました。

ていて圧倒的な存在感に憧れています。後に国際審判となられた手代木さんは国際審判という立場など関係なく気さくに沢山ご指導頂き、どんな時も最後まで諦めず学びを与えてくださったことが、私自身の審判員としての姿勢を強固なものに成長させてくれたと感じています。また、前田中央FCの長谷山さんや櫻井さんをはじめ、スタッフ皆様には、私が本気で2級審判員を目指すと決めたときに、全力で応援して頂きました。今でも支えてくれる大切な仲間たちです。人生の転機ともいえる出会いでサッカーに携わるきっかけをくれた監督や仲間たちに恥じない審判員を目指そうと全力で努力出来たことで、いつも感謝の気持ちを忘れず、出会った縁を大切に前向きに生きるメンタルが培われたと思っています。

大岩さん、手代木さんから 受け継いだ学びを後輩へつなぐ

現在、自分自身も審判員としてピッチに立っていますが、北海道協会のスタッフとして、北海道協会主催大会の審判員派遣を行っているほか、インストラクターとして審判員の普及・育成の任に当たっています。とくに18歳未満の方が対象となるユース審判員の普及・育成に力を入れており、審判員講習会を開催して、女子選手が審判員資格を取得できる機会の

拡大に努めています。また、実際に主審や副審を経験してもらうため、各カテゴリーの大会などにご協力をいただきながら研修会として実践できる場を設けています。こういった研修会では、審判員を通して新しい発見やサッカーの楽しさを違う角度から感じてもらい、はじめは緊張しながら試合に臨んでいたユース審判員が、次第に堂々と判定し成長していく姿に感動させられます。

北海道には世界で活躍された国際審判員の大岩真由美さんと手代木直美さん(現役)がいらっしゃいます。審判員としてだけではなく人として心から尊敬できる偉大な方たちです。仲間の大切さや敬う気持ち、何もないところから作り上げて行くことの重要性と心の強さを教えて頂きました。世界で戦ってきたお二方が築いて下さった北海道女子審判界を私も次世代の後輩たちへ伝え、未来のためにつなげていきたいと思います。



(公財)北海道サッカー協会
 審判委員会女子部が
 かかる「5R」

- Rising 上昇!
- Respect 大切に思うこと!
- Referee 審判員・仲間!
- Retry 再試行・何度もトライ!
- Receive 支える、仲間を迎える、
 新しいを受け入れる!

SATOMI INABA

稻葉 里美

サッカー女子1級審判員

選手・指導者の経験を活かし、選手の特徴やチーム戦術を理解しながら、
全国につながる重要な試合で笛を吹く稻葉里美さん。
審判界をけん引していく先輩たちに続き、自らも道標になるべく、
女子1級審判員として新たな挑戦に向かっています。



指導者として取得した 審判員の資格

サッカーとの出会いは、小学3年生ごろ。兄弟がサッカー少年団に所属していたこともあり、それを見ているうちに、興味を持ち始め、自分も始めたいと思うようになっていきました。3年生の冬に恵庭FC(現 バーモス恵庭FC)に入団し6年生まで続けました。中学生から19歳までは札幌第一レディースに所属しプレイヤーとしてピッチに立っていました。練習場所が遠方でしたが、チームに所属している間は、週3回の練習に欠かさず参加しました。今となっては印象深い経験として思い出されますが、中学生のころは両親に送り迎えをしてもらっていたので、迷惑をかけていたのかもしれないと思い、今、改めて感謝をしているところです。

選手を引退した後、指導者に興味を持ち、サッカーD級指導員の資格を取得し、自分が小学生のころに所属していたサッカー少年団のコーチに。およそ12年間指導に携わりました。



指導者という立場で、選手にかかわることで、選手を育てていくことの大変さを学びましたし、毎回勉強になることばかりでした。

審判員の資格は、指導者として欠かせないものだと認識し、このとき取得しました。

大岩真由美さんの講演から 審判員の道へ

指導者として取得した審判員資格を所持していたおかげで、女性審判員の研修会に誘っていただく機会がありました。そのときの講師が、現在北海道協会審判委員会女子部にいらっしゃる大岩真由美さんでした。国際審判員として女子W杯で主審を務められたご経験をはじめ様々なお話をご本人から直接うかがったことで刺激を受け、より、審判員に魅力を感じるようになり、やがて審判員としての活動に力を入れたいと思うようになりました。様々なカテゴリーで審判を務め、経験を積ませていただき、全道大会などの大きな大会でも主審を任されるようになっていきました。

選手としての経験が、それぞれのチームの戦術を理解しながら試合を進めていくことにつながり、審判員としての試合コントロールに活きてくることがあります。チーム戦術、選手の意図を考え、予測して動くことを楽しいと感じ、それが審判員の魅力の一つだと思っています。試合前には、順位や選手の特徴、チーム戦術をできるだけ知るようにしています。また、競技規則を深く理解することはもちろんですが、

走力の維持のため、週3~4回程度の有酸素運動をこころがけ、試合で走れる体力を維持するためトレーニングを行っています。いつでもどのような場面にも対応できる準備をしていくことが大切だと思っています。

自身も道標に

審判員として、自分に不足していることを受け入れることが出来ない時もあり、落ち込む時が多くありましたし、辞めたいと思ったこともあります。けれども、審判の仲間は、私が悔し涙を流してしまった時も支えてくれ、親身になってくれました。そして、家族は、いつも私がやりたいことを必ず最後まで反対せず応援してくれました。選手からの言葉、チーム役員の方たちから感謝の言葉を言われた時には、辛い事ばかりじゃないと思い、次もそう言ってもらえるよう頑張ろうと思えます。ご助言くださる方の真摯な対応に感動し、審判員活動を続ける強い気持ちと、さらなるレベルアップに挑む後押しをいただきました。

WEリーグが開幕する2021年、女子1級審判員に合格しました。試験に臨むにあたり、自分に足りないものや出来ないことをそのままにしない、課題を次に修正し生かすため一生懸命に取り組むだけでした。この姿勢を変わらず継続し、覚悟を持って望んでいかなければならぬと改めて感じました。女子審判部や審判委員会の方々の協力で、いろんな試合に参加させていただいたり、映像分析や研修会を行なってくださったから、試験で力を発揮できたと思いますし、自信を持つことができました。応援してくださった方々に、感謝の気持ちを忘れず、これからも選手のために走りきっていきたいと思います。そして、道を切り開いていった先輩方のように、私も同じように道標になって行きたいと思います。



KIYOMI ASARI

浅利 清美

BP函館キルティ・BP函館キルティ U-15 監督／
 JFA 女子サッカー普及コーディネーター(道南担当)／公益財団法人北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
 函館地区サッカー協会 女子委員長・技術委員会 トレセンコーチ
 乙部町立乙部中学校 養護教諭

函館地区の女子サッカー業務を一手に引き受ける浅利清美さんは、
 家族の支えの中で普及に向けた取り組みを進めるとともに、
 ご自身がサッカーを楽しむことを忘れず選手としても活動しています。

支えられる側から、支える側へ

中学・高校までは、バスケットボールをしていましたが、北海道教育大学函館分校在学中に、女子サッカーができるチームがあると友人に誘われ、サッカーの世界に。楽しいことしか記憶にないほどサッカーに夢中になりました。やがて、BP 函館キルティで指導することになり、JFA 公認 C 級コーチや審判員資格を取得しました。資格取得や資格を更新するために必要な講習会の受講や研修会への参加



によって、新しい刺激を受け、また、他の指導者や審判の方との情報共有ができ、指導者としての幅を広げるとともに、視野も広がっていきました。

プレーヤーとしていろいろな方々に支えていただいて、サッカーを続けられたことに感謝する中で、自分も何か役に立つことがあるのではないかと思うようになりました。皆様にご推薦いただきうちに、肩書が増え、関わりの範囲が広がっていき、函館地区を中心に女子サッカーに関わる業務を担うようになりました。

普及コーディネーターとして

私が担う役割の一つが、JFA 普及コーディネーターです。普及は、JFA がかかる「なでしこビジョン」の第一の柱であり、2017 年に各都道府県に女子サッカー普及のための調整役として配置されました。北海道には、各ブロックに1名ずつ、5 名のコーディネーターがいます。それぞれの地域によって環境は違い

ますが、女子サッカーのために頑張っている人たちを繋ぎ応援し、女の子がサッカーはじめるきっかけづくりや成長してもサッカーを続けられる環境をサッカーにかかわる人たちと共に整えていくことが求められています。私も、一人でも多くの人にサッカーを好きになってもらえるよう活動しています。

北海道の広域性は、様々な場面で議論に上がるところですが、距離の問題で活動が制限される女子選手は多くいます。中学生年代の登録減はもちろん大きな課題ですが、将来のスタッフを育てるためにも、近くにチームがない高校年代の選手や大人になってからサッカーを続けたいと考える選手にも、サポートできるようにしていきたいと思っています。色々なところに顔を出し、コミュニケーションをとって情報交流を行い、各地域での事例を自分の担当する地域に活かすとともに、情熱をもって活動している人をサポートしていくことを意識しながら、今後も活動したいと思います。

家族の支えのおかげで、 サッカーを続けられる

サッカーを通じて、多くの人との出会いがあり、北海道のみならず日本中にいろいろな形でサッカーに関わっている人がいることを知りました。自分にとっての刺激や励みになっています。この頃は、サッカーと一緒にやったら、あれこれしゃべらなくてもどんな人なのかわかるようになってきました。そうしたサッカーでのつながりは、私の活動の大きな支えです。

そして、最も支えてくれているのは家族です。同年代で現役プレーヤーの夫、それぞれの環境でプレーヤーとしてがんばっている三人の娘たちです。家族は、私がサッカーを続けていくことを応援してくれていて、家事が出来なくとも家にいられなくてもやめるように言われた



ことが一度もありません。夫はシニアの練習に連れて行ってくれたり、大会の審判も引き受けってくれ大会運営を助けてくれます。娘たちも小さい頃から、グランドのわきで練習の邪魔をしないように遊んでいてくれましたし、大人になった今では、プレーヤーとして厳しい指示や指導をされることもあります。自分で自分を励ましながら、家族に支えてもらってサッカーが続けられています。どこまでできるかわかりませんが、みんなの力を借りていけるところまで頑張りたいと思っています。

運営スタッフとして、サッカーをしている人たちが、楽しそうにプレイしているのを見たり、指導者として、アドバイスしたことがうまくいったときの充実感は得難いものです。しかし、まずは、私自身がサッカーを楽しみ、生涯現役プレーヤーでありたいと思います。全国で対戦するチームには 70 代のキーパーや 60 歳以上の選手がたくさんいます。北海道では同年代や年上の選手が少ないので、まだ現役でサッカーができると心強く感じました。サッカーがうまくなくても、子どもがいても、おばあちゃんになってもサッカーが楽しめるんだというみんなの励みになればと思います。

HARUMI ENDO

遠藤 晴美

十勝地区サッカー協会 女子委員長／

BIGZ池田 代表／

社会福祉法人 池田光寿会

池田町デイサービスセンター・池田町デイサービスセンター居宅介護支援事業所 課長・介護支援専門員

大人になってからサッカーに出会い、多くの出会いを糧にして、
十勝地区の女子委員長としてご尽力されている遠藤晴美さんは、
選手の皆さんの活躍と人間としての成長を願っていらっしゃいます。



全国ママさんサッカー大会での 出会い

小学生のときはスケートと剣道、中学高校はバレーボール、そして、社会人になってからソフトボールやカーリングと、様々なスポーツを体験してきました。サッカーとの出会いは、21歳のとき。会社の同僚の奥様に誘われ「池田シルфиー」に入りました。入ってすぐに全道大会に連れていかれ、札幌大学のグラウンドでただボールを追いかけただけの試合に出たことを思い出します。そのことがきっかけでサッカーがうまくなりたいと思い、週3日、池田まで練習に通いました。

十勝地区は、1960年代から池田町を中心にサッカーが盛んであり、また、日本リーグ公式戦を招聘するなど、トップレベルの試合を観戦できる環境も比較的早く整っていました。十勝地区協会として、施設の充実に取り組んだこともあり、全国的に見てもグラウンド保有率は他を圧倒しています。今では、帯広の森陸上競



技場をはじめ、十勝地区には、天然芝・人工芝あわせて約50のグラウンドがあります。このような環境だからこそ、女性がサッカーをすることに理解のある方が多く、1985年、十勝地区に初の女子サッカーチーム「池田シルфиー」が誕生。現在、私が代表を務めるBIGZ池田として現在まで続いています。1996年には、LFC清水、リトルガールズママの選手と十勝合同チームで参戦したママさんサッカー大会の全道予選で優勝し、全国大会へ。私にとって初の全国大会出場でしたが、準優勝という結果を得ました。ママさんサッカー大会は私にとって印象深い出会いが多く、日本で最初の女性指導者といわれる綾部美知枝さんを知ったのもこのときです。綾部さんには女性もサッカーで活躍できることを教えてもらいました。また、全国準優勝を果たしたとき、のちに国際副審として活躍される清水町出身の手代木直美さんのお母さんもチームメイトとして出場しており、当時、小学6年生の直美さんが一緒に静岡まで来てくれて応援してくれたことを思い出します。彼女が帯広南商業高校でサッカーをはじめ、その後素晴らしい審判員になったことはとてもうれしい出来事です。今も応援しています。

十勝地区の女子選手の活躍

2000年4月、十勝地区協会で女子サッカーへ力を入れる機運がさらに高まり、女子委員会が設置されました。女子のトレセン活動にも力を入れるようになり、中学女子サッカー十勝選

抜が編成されたのもそのころです。指導者の皆さんのが熱心な活動により、2006年には北海道ガールズエイト(U-12)大会でとかち帯広トレセンが優勝。2013年にとかちFCなでしこが熊谷高瀬杯ガールズ(U-12)サッカー大会で優勝。2020年にはU-15選手権全道大会で十勝FSリトルガールズが初優勝し、全国の切符を手しました。また、フットサルにも力を入れており、FC甲山レディースや十勝FSリトルガールズが全国大会で実績を残しています。

私自身、選手から運営スタッフへと形をえて、サッカーに関わり続け、選手たちのためにできる限りのサポートをしたいと思い、審判員資格やマッチコミッショナー資格を取得。今は女子委員長としての任に就いていますが、十勝地区的選手の活躍は、何よりもうれしいです。

選手の皆さんへ

十勝の選手たちみんなを自分の子どものような気持ちで見守っています。サッカーの技術がうまくなるだけではなく、自分のことは自分でやれる選手になってほしいと思っています。掃除、洗濯、食事の用意、後片づけ。特に食べることに興味を持って、お母さんの味を習得してほしいです。楽しんで食べて、健康管理ができて、強い体を作つてほしいと思います。

私の母は体が弱く、私が小さい時から小学校6年生まで、入退院を繰り返し、母と過ごす時間が少なく、何でも自分でするしかなく、10歳ごろには夕食の準備をしてしていました。姉とけんかしながらカレーライスを作っていたのを思い出します。大袈裟かもしれません、これが生きる知恵や力になっています。

私はもう退職する年齢ですが、退職後も様々な形で人の役に立ちたいと思います。今まで努力して取得した資格を生かし、自分ができることをやっていきたいと思っています。



MUTSUMI NEGISHI

根岸 瞳美

苫小牧地区サッカー協会 女子委員長

2020年から苫小牧地区の女子委員長に就任した根岸瞳美さんは、
少年団に入った息子さんの影響でサッカーの世界に。
苫小牧地区でサッカーの楽しさを共有できる仲間を増やしたいと
活動されています。



息子の一言で、サッカーの世界に

学生時代は、スピードスケートや陸上競技選手で、とにかくスポーツをし続けていたものの、卒業後は、全くスポーツをしない生活に。しかし、息子がスポーツ少年団に入団し、サッカーを始めたため息子の応援に全力投球。ときに助言めいた言葉を発すると、息子からサッカーのルールも知らないくせに、と一言。息子の言葉にハッとしたのもあり、悔しくもあり、ルールを覚えるためにサッカーをはじめることにしました。息子の少年団の保護者仲間に誘われて入った若草レディースは、中学生からママさんまで、年齢も立場も様々でしたが、家族のようなチームでした。学生時代以来に体を動かすこともうれしく、サッカーが楽しくて仕方ありませんでした。はじめのうちは、息子の応援がメインで、自分は二の次でしたが、息子の成長につれ、自分の時間もでき、やがてチームメイトの黒澤さんに声をかけていただき、大会運営に関わるようになりました。



地区協会の一員としての自覚

黒澤さんは、苫小牧地区協会で、女子委員会や4種、競技運営など様々な業務をご担当されている方で、私が最も尊敬する方です。黒澤さんと一緒にキッズのフェスティバルや幼稚園の巡回指導をお手伝いしたり、以前女子委員長でいらした萬純二郎さんとともに北海道協会主催の女子の大会運営の経験を積みました。苫小牧地区は、女子の大会であっても、社会人やシニアの皆さんや審判の皆さんがとても協力的で、困ったときには助けてくれます。皆さんのやさしさや情熱に触れるたび、苫小牧地区協会の一員としての責任感が次第に芽生えてきました。

苫小牧地区には、現在のノルディア北海道の前身であるASC adoomaがありました。山田静監督率いるadoomaは、全国を目指す強い意志をもって取り組んでいらっしゃいましたので、大会運営には気合も入り、また緊張感を持って臨みました。2009年に全国リーグ参入を決めたことは苫小牧地区にとって大きな出来事と言えます。この頃、北海道女子サッカーリーグには、明清高校の選手として高瀬選手(現INAC神戸)も参加していましたので、運営に携わっていた者としては感慨もひとしおです。

また、adoomaが札幌地区に移転したのは、高いレベルで中学生選手が活動できる場がなかったのですが、ASC北海道が、レディー

スチームを再度発足してくれたことで、U-15年代の選手たちの活躍は目覚ましく、2019年には、北海道の第一代表として、全日本選手権に出場するまでに成長しました。これまで、少年団を卒団したあと、他の地区まで通ったり、やめてしまう選手もいましたが、今は苫小牧地区の中で継続して競技を続けられるようになりました。チームの皆さんにとても感謝しています。

サッカーの楽しさを共有できる仲間を増やしたい

運営した大会に出場した選手が、全国大会に出場したり、強豪校に進学したり、そういう身近な活躍が、私にとっては、心から嬉しい出来事です。このような地域レベルでの感動の積み重ねが、なでしこジャパンの感動をより大きなものにしているのではないかと思います。苫小牧地区から、北海道から、全国で活躍してほしいと願うのは、様々な形でサッカーに関わる方を勇気づけ、元気づけてくれるからだと思います。

女性がサッカーを継続するうえで、結婚や出産など、様々な場面に遭遇します。私自身は、子育てをはじめてからサッカーに出会いましたが、一緒にサッカーを楽しむ仲間には、これから女性としての転機を迎える方もいらっしゃいます。若い選手の皆さんには、まずは進学という節目を迎えます。選手として、または指導者や審判、運営スタッフとして、選手のお母さんとして、どんな形であっても、「サッカーの楽しさ」を胸に、サッカーに関わり続けてもらえたなら、多くの感動を共有できると思います。私は女子委員長1年目であり、まだ分からぬことだらけではありますが、今も感じている楽しさを継続して持ち続けて、活動したいと思います。



MAI NAKAMURA

中村 麻衣

JFA女子サッカー普及コーディネーター北海道 札幌地区担当／
公益財団法人北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
一般社団法人札幌サッカー協会 理事 女子普及担当／
TeineEGZASFC監督 兼 選手／リカシィ コーチ／なでしこ治療院 院長(鍼灸師)

2009年、ASC adooma (現ノルディア北海道) のキャプテンとして、
全国リーグ参入を決めた中村麻衣さん。
選手時代に支えてくださった方への恩返しとして、楽しくサッカーを続けられる
環境づくりに挑んでいます。

選手時代に支えてくださった方への 恩返しとして

小さいころから近所の「お兄ちゃんたち」とサッカーで遊ぶ機会が多く、サッカーに触れた時期は比較的早かったと記憶しています。高台イレブンやエンジェラーズJr.でサッカーを楽しみつつ、体操やソフトテニスを習ったり、中学校の部活動としてソフトボール部に所属するなど、様々な競技を経験しました。とにかく体を動かすのが大好きな子どもでした。高校生になり札幌北斗高校サッカー部に入部。



1年生のときに強豪高校の選手に交じって選抜チームにも選ばれましたが、試合には出場できず悔しい思いもしました。その後、ノルディア北海道の前身であるFC adooma (その後ASC adoomaに名称変更) に所属。2009年、御殿場で行われたチャレンジリーグ参入決定戦では、キャプテンとして参戦し、個性豊かなメンバーとともに参入を決めたことは忘れない思い出です。

adoomaのチームコンセプトは、山田静監督が掲げた「北海道の土作作りとして全国に通用するチームになろう」。この考え方方は今でも私の根源にあり、思えば、選手時代から抱いていた土作作りをしていくという気持ちの延長線上に、今の活動があるのかもしれません。選手時代に色々な方達に関わってもらい、支えてくださったことへの恩返しをしたいという気持ちが、今の自分の活動を支えていて、選手達が楽しく気持ちよくプレーできる環境をつくることが、そのお返しになるのだと思っています。

普及コーディネーターとして

ノルディア北海道の選手として最後の年に、JFA公認C級コーチの資格を取得。指導者としての活動を通じて、北海道の女子サッカーのために自分できることは何だろう、と漠然と考えているときに、JFA女子サッカー普及コーディネーター北海道(札幌地区担当)の話をいただきました。普及コーディネーターは、女子サッカー普及活動の調整役として、既存の事業や行事、制度などを有効活用し、それらを更に発展させ、また、女性がサッカーにより気軽にアクセスできる環境の創出や整備を様々な観点から促進する役割を担っています。「女子サッカー」とひとくくりに言っても、キッズやU-12、U-15、U-18、レディースと、様々なカテゴリーが存在し、その分大会が存在し、スタッフの力が必要なり、また、女子以外の他のスタッフとも連携していくなくてはなりません。とくに札幌地区は、女子サッカーにかかるチームや選手が多いので、つなぐ役割が重要です。3年前、引き受けた当初は、何ができるのか、何が必要なのか、全くの手探りの状態でしたが、フットワークの軽さを武器にして、とにかく多くの方との直接会話をすることを心掛けました。その中で、キッズ年代の普及活動にご尽力されている佐藤公一先生や山脇先生、佐賀先生にキッズのイベントに声をかけていただいたり、親身に相談にのっていただきました。皆さんのご助言を受け、普及コーディネーター2年目には、中学生年代に登録者数が減っていくという課題解決に向けて、札幌のU-15年代のチームと連携して、小学6年生と中学生チームの交流会を開催することができました。3年目は、札幌地区協会の今枝専務理事の働きかけもあり、札幌地区協会の女子普及担当の理事を任せられることに



なり、北海道協会と札幌地区、様々なカテゴリーをつなぐことが少しづつできるようになってきたという実感を得ています。

ずっと楽しくサッカーを続けられる 環境づくりを

本業であるなでしこ治療院の院長としての仕事でも、年代関係なく話ができることや、臨機応変に対応できること、何よりフットワークの軽さに、サッカーの経験は活きてています。お客様も、サッカーに全力過ぎる私を理解してくださっていて、ありがたいことに、応援してくださっています。選手時代からの仲間たち、指導者仲間、協会のスタッフの皆さん、指導しているチームの保護者の皆さんなど、私は、サッカーを通じてたくさんの方に出会うことができ、良いときも悪いときも声をかけてくれる人がいることに心から感謝しています。

私自身、出来なくなるまで、楽しくずっとボールを蹴っていて思っています。だからこそ、サッカーをやりたいと思っている人達が環境のせいで出来ないということが無いようになっていってくれたらいいな、と思います。各年代でサッカーとの関わり方が変わってくる時に、どのカテゴリーでも楽しくずっとサッカーを続けられる環境になるよう、これからも活動を続けたいと思います。

MIKI TAKUMA

詫間 美樹

北海道札幌東商業高等学校女子サッカー部 監督／
北海道札幌東商業高等学校 教諭／
*2021年度よりノルディーア北海道 監督

なでしこリーグ1部アルビレックス新潟レディースで活躍された詫間美樹さん。

選手として、厳しくも愛情ある指導を受けて成長したことや、
コーチングの重要性や指導者としての姿勢を学ばれ、
この経験を北海道の女子サッカー界へ還元してくださっています。

アルビレックス奥山監督の厳しくも愛情ある指導で精神的に成長

幼少期に年上の従兄弟に教わったのがサッカーとの出会いだったと思います。小学校に上がる前から友達や保育園の先生を相手にドリブルをしていたことは覚えています。小学3年のとき札幌信濃サッカーボー少年団の女子チームには姉や友達と一緒に入団。週3回の練習が待ち遠しくて、どんどんサッカーにのめり込んでいきました。その後、札幌アグレ厚別信濃FC、札幌リンダを経て、北海道文教大学明清高等学校女子サッカー部に入学し、自分の力を試すべくインカレ常連校である東京女子体



育大学に進学。卒業後は、なでしこリーグ1部のアルビレックス新潟レディースへ入団することができました。

アルビレックスでの3年間は競技生活の中で最もサッカーと向き合い、自分を成長させてくれた時間でした。サッカーに集中して取り組める環境は多くの人の関わりの中で成り立っていましたことを知りました。恥ずかしいことですが、大学生までの私は謙虚さを見失うところがありました。当時の監督の奥山達之さんからは、日常生活の甘さがサッカーに出ていると何度も指摘を受け、根気強く厳しく指導していただきました。厳しい指導の中にも愛情を感じることができ、必死に食らいついでいました。また、CBとしての能力を見いだし、育ててくれました。精神面へのアプローチがなければCBとして責任感のある選手にはなれなかっただし、安定したパフォーマンスもできなかったと思います。あの時、真剣に向き合ってくれたことを本当に感謝しています。



引退後、北海道で指導者の道へ

札幌に戻り、2014年から北海道文教大学明清高校で教員として女子サッカー部の指導をしました。明清高校には、卒業後に道外でプレーしたいという選手が多くいたこともあり、どのような環境や状況でも自分を見失うことなくサッカーと思いっきり向き合ってほしいという思いで指導してきました。

2020年より、北海道札幌東商業高校で期限付きの教諭として、また、女子サッカー部監督として勤務することになりました。部員の半数以上は、中学校までは他競技経験者で、チームのレベルは高くありませんが、上級生が下級生に熱心にサッカー教えるなど、非常に仲の良いチームです。日々上達していく選手を見るとやりがいを感じます。今年度の高校選手権で初戦敗退はしましたが、選手の本当に勝ちたいというプレーを見ることができて幸せでした。また、全校生徒数が900名を超える規模の大きい学校なので、教員として働く中で、様々な視点で物事を捉える方法があるんだと教えられ、サッカーの指導の際にも、選手の視点を大切にするようになりました。

ノルディーア北海道監督への挑戦

昨年、JFA公認B級ライセンスを受講して、サッカーがもっとしたいという気持ちが強くな

り、ノルディーア北海道のコーチとして、石井監督の下で指導の勉強がしたいとご相談したところ、監督としてやってみないかとお話をいただきました。何度か石井監督や、チーフマネージャーの金子さんとお話しを重ね、お二人のクラブや選手に対する思いの強さを感じ、監督として挑戦したいという気持ちを固めました。

ノルディーア北海道は、クラブとして2025年のWEリーグ参入を目標に掲げているので、できるだけ早く1部に昇格しなければいけないと思っています。そのためには、年間のリーグを戦う上で監督として戦略力を高めなくてはいけないと思います。指導者になって年間を通してリーグ戦は経験したことがないので、選手の起用方法など先日の試合にとらわれすぎないようにと考えています。また、選手一人ひとりがSNSなどを通してクラブを盛り上げるために熱心な活動をしているので、私自身も、ノルディーア北海道を多くの人に知ってもらうことを心掛けたいと思います。そして北海道全体のレベルアップのため、将来的には、「チーム北海道」という考えのもと、高校・大学・クラブチームがチームの垣根を超えて切磋琢磨できる環境があると良いと思います。例えば、チーム単位での合同練習や合同合宿などを定期的に開催することで、どのチームも刺激を受けることができると思います。

私は、サッカーを通して多くの人と出会い、大切な友人ができました。辛いことはたくさんあった気がしますが、克服できたのはサッカーが好きな気持ちとチームメイト、指導者仲間や選手に助けられたからだと思います。サッカーを通して諦めなければ何かが起こるという体験を何度もしてきました。そして、もし何も起きなくても、諦めなかつたということが自信になりました。この自信を胸に、指導者としてさらに成長し、いくつになってもサッカーを誰よりも楽しんでいたいと思っています。